

---

# 屋根裏の冒険

流離戴勝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屋根裏の冒険

### 【Nコード】

N8361R

### 【作者名】

流離戴勝

### 【あらすじ】

暴力・監禁・傲慢、悪魔である父から逃げ出すために人の家の屋根裏での生活を試みる少年。ひたすら自由を求め、スリリングに生きる。友人2と夢を追う幸福な生活だったが、ある日その全容が見つかってしまう。少年がとった行動とは…？

## <家出>第一部

森も海もない都会の片隅に、四角く象られた白い家がある。この街は昔、蓮の花で彩られていたことから、「蓮色の街」という名前がついている。だが今となつては工場の悪臭で廃れ、その面影すらない。

白い家には悪魔が住んでいる。息子を平気で監禁し、過度な暴力を繰り返す傲慢な父親だ。

「出してくれ！僕を！ここから出して！」息子は必死になって叫ぶ。

「うるさいガキめ！黙らねえとひどいぞ！」父の手にはバットが握られている。

少年の名はない。いや、あつても父が教えてくれないのだ。母は十年も前に行方不明になったきり、一度も姿をみせない。まさに最低の生活、最低の親、すでに、犯罪である。

少年の部屋は牢獄のようなつくりで、食事はカップラーメンのよなもののだけ。他にベッドとトイレがあるが、床は冷たいコンクリートで、娯楽のためのものは一切ない。ドアにも窓にも鍵がかかっており、外出などとてもできない。

一方父の方は、親、つまり少年の祖父に当たる人物から遺産を相続しており、月に三十万円を下ろして使うという決まりで、つまり一日一万円計算で快適に暮らしている。快適と言っても遊び呆けるだけの、自堕落な生活である。王と奴隷が二人で住むような貧富の差、格差社会が一つの家の中で生じてしまっている。

「出せ！僕をここから！」今日も必死になって叫ぶ。その言葉を遮るように、音を立ててドアが開いた。

「黙れ！お前はおとなしくしていればいいんだ！親の言うことにたてつくな！」

「アンタが親？冗談だろ？親なもんか、早く出せよ！僕はここから出て行くんだ」

「それをオレが許すと思うか！？警察に知られたらどうする……」

そのとき、少年の頭にある発想が浮かぶ。

「警察……？そうかその手があった。知らせてやる、そして僕もおさらばだ」

「んん？何を企んでやる？…まあいいさ、お前はここから出さ…ん…出ることなど不可能だ。それと、次騒いだら殴り倒してやるぞ！」父はこう言ってドアをボタンと閉め、鍵をかけた。

「大丈夫、僕は逃げ出せるさ」少年はニヤリと笑った。

## <家出>第二部

その日の夜、少年は行動に出た。

この家は、父の書斎の真上が少年の部屋になっており、三十万円が納められた金庫もその書斎にある。そしてちょうど三日後が月のはじめで、三十万円を銀行から下ろす日なのだ。

床のコンクリートは脆く、ひびが入っている。そこで少年はそのひびの部分に、食事のとき使う箸で穴を開け始めた。父はテレビをみていてそんなことに気づく様子はまるでない。少年はその日、徹夜で穴を完成させた。

「よし、まずこれでアイツの金庫の暗証番号が見えるぞ」そう、少年は三十万円を盗んで家出するため、父の金庫の暗証番号を覗いて確かめようとしたのだ。

次の日、父は金庫に残った最後の一万円で遊びに外出した。その際、金庫の暗証番号を少年は確かに見た。

2 3 8 2 7 1 1 2

少年は八桁もある数字をすばやく紙に写した。

「問題はこの部屋からどうやって外へ出るかだ」少年は防音の壁にもたれ、考えた。

そしてふと天井を見上げると、一カ所崩壊した部分があらわになっている。その奥には折れた鉄線を不器用につないでいる、針金があった。

少年はベッドの上にプラスチックの白い丸テーブルを乗せ、それに登った。針金を巻き取り、テーブルから降りると、少年はその針金を巧みに工作し、鍵型に折り曲げた。

“ピッキング”

少年はドアの鍵穴にそれを通す。すると、ガチャッと音を立ててドアが開いた。だが少年は入る部屋を間違えたかのように、すぐに閉めた。

“逆ピッキング”

少年は極めて器用で、それを可能にした。

次に少年は荷物……と言っても少ない荷物をまとめ、袋に詰め込んだ。

幼い頃、少年が唯一遠くへ旅行したときにその海で拾った綺麗な貝殻と、母が少年を抱いている写真がある。母は優しい笑顔をこちらに向けている。どうして行方不明なのか、少年には理解できなかった。また、きつと優しい人なのだろうと信じ切っていた。

少年はためらったがその二つを袋にねじ込んだ。

そして三日目、つまり三十万円が入ってくる日。父は八桁の数字を入力して金庫を開け、二十九万円を金庫の中に放り投げると、一万円を手にして外へ駆けだしていった。

少年はまずピッキングでドアを開け、書斎へ駆け下りた。そして紙を一回一回見ながら暗証番号を入力した。やがて開いた金庫から二十九万円を丸ごと掴み取り、ポケットに収めた。そして自分の部屋の窓の鍵を盗み出し、急いで部屋まで駆け上ると、すぐさま窓を開けた。そして昨日のうちにまとめておいた荷物に二十九万円を入れ、目立たないところへ落とした。

窓を閉め、鍵をかけると再び一階に下り、鍵を定位置に戻した。

そのとき、外で人が走る音を少年は聞いた。少年の胸は高鳴っていた。父が帰ってきたら、計画が台無しになってしまう。

足音が近づいてきて、少年の目に飛び込んできたのはトレーニング中のランナーだった。少年はホッとため息をもらし、次の行動にでた。

少年は物置へ向かい、ハンマーを取り出した。そして外へ出て、玄関のドアノブをムリヤリ壊し、あたかも強盗が侵入したかのように見せかけた。

それからが大変だった。警察がきたらまず「なぜ金庫が開いたのか？」という疑問が浮かび上がる。もし強盗が忍び込んだなら、暗証番号を必死になって探すことは間違いないのだから、少年もその行動に出た。

書斎を散らかし、父が書いた暗証番号を記した紙を探した。そして二十分後にやっと見つけたのだった。

|   |   |
|---|---|
| 2 | 2 |
| 3 | 3 |
| 8 | 8 |
| 2 | 2 |
| 7 | 7 |
| 1 | 5 |
| 1 | 5 |
| 2 | 2 |
| ○ | × |

少年は部屋へと戻り、逆ピッキングで鍵をかけた。そして針金を元に戻し、証拠を消した。

少年はベッドに手を広げ倒れ込み、大きく息を吐いた。

## <家出>第三部

「いいか？家に強盗が入った。お前は警察になにを聞かれても黙っているんだぞ」

父が帰ってきて言った。

「冗談じゃない。アンタのことを言っただけでやる！そうなりや逮捕は間違いない」

「待て！いいか容疑がかかるんだぞ？でもオレがここでお前は外出していたと言えば乗り切れるんだぞ？」

「僕が盗んだわけじゃないんだから関係ないさ」

「ちっ！」

舌打ちをして父はハンマーを取り出した。

「だがこうしてしまえば証拠はねえさ！」

そついうと父はハンマーでドアの鍵を壊した。

「強盗の野郎と同じやり方だ…残念だったな」

そつ言い放つと父は携帯を取り出した。

「もしもし？警察か？今すぐ来てくれ…住所は…」

五分後、警察がやってきた。警官の一人が父に話しかけた。

「ご家族の方は？」

「息子がいます。案内しましょう」そついつて何人かがゾロゾロと少年の部屋に押し寄せた。

「君はこの部屋にずっといたのかな？」

「はい、ずっといました」

父は不安でたまらないという顔をしている。

「じゃあ何か音を聞いたたりしただろうね？」

「いいえ。壁が防音になっていきますので」警官は顔をしかめた。

「防音？何のために？」 「それは……」

「勉強をするためです」 少年の言葉を遮って、父が言った。

「いやあ近所からの騒音がひどくてね。支障が出ないように」と  
警官に納得した様子はなく、疑っていることは明らかだった。

「じゃあお二人さん、事情を聞きたいからついてきてよ」

少年の心は踊っていた。もうこれで外へ出てしまえば帰ってくることはない、少年は振り返らずに車に乗った。

二人は証拠が見つからないということで、一時的に解放された。

「先帰る」 少年が言った。

「なんでなにも言わなかった？」 父が不思議そうに尋ねた。

「僕が言わなくてもいずれ捕まるからさ」

「何だと!？」

「もう運命なんだよ。アンタは捕まって自由を手に入れられない。

僕は手に入れる」

父は今にも怒りで狂いそうだった。

「長くいきることよりも自由を求める。アンタと違ってね」

「何を言っているのかわかっているのか？ 帰ったらすぐ鍵をかけてやる！」

「ぜひぜひかけておいてくれよ」 そのときはもういないよ、と心の中で舌を出した。

こう言って少年は帰っていった。

取り残された父は怒りで真っ赤になり、座っていた椅子を思い切り蹴飛ばすと、唾を吐いた。

少年は計画通り窓から投げた軽い荷物をかつぎ、そのまま家出した。途中、雨が降ってきたので暗いゴミ捨て場で雨宿りをした。隣には栗毛色をした猫がいて、少年と並んで雨を見ている。

「君となら心が通じ合いそうな気がするよ」

やがて少年は立ち上がり、あてのない旅に出た。途中までお供する

ようんについてきた猫とお別れをして、また大きく息を吐いた。

雨はいつの間にか止んでいた。

## <クローバー平原の空き家>

あてもない少年が行き着いた先はクローバーが生い茂った平原、クローバー平原だった。辺りは薄暗く、人影はなかった。

そして目立ったのは、古ぼけて今にも崩れそうな空き家だった。少年は恐る恐る近づき、少しためらったが、今日の宿と決めた。

中は陰惨で蜘蛛の巣が多く、冷え切っていた。二階に上がり荷物をおろす。よく見ると、もう一つ上へ行けるようになっていた。

そこは空き家の屋根裏で、壊れている木の窓のそばにはベッドまであった。荷物を持ってきて、ベッドに座り込んだ。そこにはランプがあり、床には散らかったマツチもあった。少年はそれを灯して明るくした。すると部屋全体が見えるようになり、机があることに気づくと、その机に近づいた。

埃をはらいつつ、迷わずに引き出しを開けた。そこで少年が目にしたものは、古ぼけた地図だった。誰かが手で描いたものらしく、いたずら描きが目立っている。

少年はしばらく動かずに見ていたが、やがてそれをくると丸めて、自分の荷物入れの隅に入れた。

少年が目にした地図はただの地図ではなく、「薊色の街」とその隣の「茜色の街」の全ての家の屋根裏だけを記したものだ。地図から見える屋根裏のほとんどが未使用で、まるでまだ塗られていない塗り絵のようだった。

「そうだ！これを使って屋根裏を自分の家にしよう」

「屋根裏の冒険だ！」

## < 薊色の出会い >

少年は一つ街を越えて、「薊色の街」に来ていた。ここは蓮色の街とは違い、少年が大好きな海があり、薊が美しく咲き乱れている。

少年は読書というものを一度してみたいと思っていた。また、薊色の街の地図も必要だったことから、十五分後には街の図書館にいた。

少年は数冊本を手に取り、心を踊らせながら読みふけた。地図を頭に入れ、図書館を出ようかというときになって、一人の少年が気になった。

隣に何冊も難しい本を置き、必死に鉛筆を走らせているのだった。

「何してるの？」

少年は尋ねてみた。

「ああ…小説を書いているんだよ。この本はオレの好きな本で、気に入った表現とかを盗んで写しているんだよ」

「ずるいね」

「何か本は読んだことある？」小説家は苦笑して訊いた。

「さつき生まれて初めて読んだんだ。まだ、よくわからないや」

「生まれて初めて！？今まで興味がなかったのか？」

「ううん、ただ僕家出してきたんだ。親がひどくて、読書なんてとてもね」

「そういうことか。オレも家出してきたんだ。小説家になることを反対されてさ。嫌になって飛び出してきた」

「どこに住んでるんだい？」

「決まってない…ここの館長さん優しいからよく泊めてくれるんだけど」

「もつと楽しいところを見つけたんだ。一緒に住まないか？」  
「それは嬉しいな、ぜひお願いするよ」

二人は外へ出ると公園のベンチに腰掛けた。そして少年は屋根裏のことに、今まで自分がどういう環境で育ってきたかということを話して聞かせた。

「危険だな、かなり」

小説家が言った。

「でも見つからなければ大丈夫だよ」

少年は答えた。

「じゃあ、探しに行くか…」

小説家はやっと納得して言った。

「ここに地図がある。まずは…ここ！　ここ行ってみよう！」

二人が向かった先は海沿いのログハウスで、公園から五キロほどのところにあつた。

ログハウスの当主は留守で、窓から簡単に入り込むと、すぐさま屋根裏に駆け上った。

そこは埃が多く、とても寒かった。

「まず掃除しよう…そして家具を買ったら搬入しよう」

そう言つて二人は掃除を始めた。（その家の掃除道具で）

二十分後にはすべてをやり返え、家具を買うために家の外にいた。

「いくらあるんだ？」

店に向かう途中で、小説家が尋ねた。

「二十九万円。親のを盗ってきた」

少年が答えた。

「何件も家をもつんなら、ちょっと足りないな。食料だつてあるし」

「僕は食料に費やす気はないよ。全部家具にあてがうんだ」

「全部家具だって！？そんなことしたら死んじゃうだろ」

小説家は驚いて言った。

「死にそうになったら盗めばいいし…それにちよつとは食料に費やすよ」

「なんでそこまで？」

「僕の夢は自由であることなんだ。長生きなんてしなくていい。ただ長い自由があれば」

「そうか…じゃあお前はそれでいい。でもな、長い自由も食べ物がないと手に入らないんだぜ？」

「それもそうだ。まあなんとかするさ」

小説家は呆れた顔でいた。少年は気丈うに振る舞っていたが、実はこのとき言葉に詰まっていた。そんな会話をしているうちに、店についた。

「いくらある？」

今度は少年が尋ねた。

「十万ちよつと。親のをせびつてきた」

小説家は肩をすくめて答えた。

「じゃあ…言いずらいんだけどさ」

「何？」

「その十万を食料費にしてくれないか？」

少年は口を濁して言った。

「理由は？」小説家は目をそらした。

「小説家になるために必要な本は図書館にある。あとは机とか書くものとか紙だろ？それだけ買えば半分以上は浮くんじゃないか？」

「確かにまあ…」

小説家は迷った様子でいる。

「いつ小説家としてデビューする気にいる？」

「二十歳。あと四年後だ」

「その頃はもうこんな生活してないと思うんだ。わかるだろ？」

「言われてみればその通りだな」

「わかってくれて嬉しいよ」

生まれて初めて店の中へ入った少年は、歓喜の心でいっぱいだった。

絨毯、ソファ、マットレス、シャンデリア、クッションにコタツなどなど…。

少年は絨毯と椅子を二脚だけ買って、外に出た。

そしてそれらを手で持って歩いた。その道中で今度は中古の家具屋があったので、二人はそこに寄った。

少年は、表面がガラスでできた小さな丸テーブルを、小説家はちゃんとした机と椅子をそれぞれ買い、外に出た。

「どうする？持てないぜ、さすがに」

小説家が言った。

「往復しよう。それまでは見張りをかわりばんこにして」

こう言って一人一往復したとき、最後の荷物は二人で持つことにした。

だがもう少しで着くというところでまた、ある店が少年の目にとまった。

それはゲーム屋だった。

「勘弁してくれよ」

小説家が言った。

「なあにすぐ戻ってくるよ」 その言葉通りに少年は、三分後には戻ってきた。大きな箱を抱えて。

「それは何？」

小説家が尋ねた。

「チェスだよ。他にもバックギヤモンとかいろいろ入ってるんだ」

「チェス？知ってるのかい？」

「前に一度、親が鍵をかけ忘れた日があつてね。そのときテレビをつけてみたらチェスがやっていたんだ。これをいつか友達とできたらいいなって思ってた」

「なるほど、バックギヤモンは…？」

「知らない。この箱に書いてあつただけっ」

少年はいたずらな笑いを見せた。

三十分後、屋根裏は一変していた。

暖かい絨毯、その隅には机と椅子が、窓際にはガラスの丸テーブルと椅子二脚が置かれており、テーブルの上にはチェス盤が置かれていた。

それだけで、冷たかった部屋もとても暖かいと感じるのだった。

二人は緩い会話で盛り上がっていた。チェスのルールを覚え、二人で対戦していた。

と、そのとき、ドアの閉まる音が聞こえた。

ログハウスの当主が帰ってきたのだ。

## <茜色の出会い>

「あら、お父さんたらまたマットレスを？」

「ああそうだ。二つな二つ。コイツは役に立つ」

「あーあ、一度ソファに腰掛けてみたいわ」

屋根裏の二人は耳をすまして、父と娘の会話を聞いていた。

「聞いた？この人間そうとう狂ってないか？」

小説家が小声で言った。

「うん、僕たちほどじゃないんじゃない？」少年は苦笑いして答えた。

「マットレスがありすぎて…床にもマットレスを敷き詰めるつもりですか？」主人の妻が言った。

「まさか、ハハ…。なあにスペースはとっても嫌なものじゃあないさ」

「邪魔になるようでしたら屋根裏部屋にでも放りこんでおきますからね」

この言葉に二人はドキツとしたが、すぐに娘が話題を変えたので安心した。

「マットレスおやじってのどう？」

まもなくして少年が言った。

「最高！決まりだな！」

二人はしがない会話でその夜を過ごした。

ログハウスの住人が出かけると、二人も外へ出た。少年はクローバー平原の空き家で見つけた地図を持って、「ここに行こう」と言った。

少年が指差したのは「茜色の街」だった。薊色の街の隣の隣に位置する街で、十二キロほど先のところにある。

小説家が同意すると、パン屋で朝食を買い、公園で食事をした。そこでルートを確認して、五分後には歩き始めていた。

二人が茜色の街に到着したのは正午のことだった。茜色の街は田舎で田んぼや畑が多く、三分の一を美しい森に囲まれている。中心街は西洋風のつくりになっていて、イギリス風の街灯が立ち並び、家々や道路はレンガ造りで、異国情緒が漂っていた。

ベンチには紳士が腰かけ、町花である茜の花がいつそう雰囲気を作っていた。

二人はいったん別れ、中心街の教会で待ち合わせることにした。小説家は図書館へ向かい、少年は森へと向かった。

森の中はうつそうとしており、暗くて静まり返っていた。けもの道や動物の足跡をたどるうち、光が差し込むスペースに出た。そこで棒を拾い上げ杖にすると、また歩き始めた。

だが十歩も歩かないうちに、少年は突然足を止めた。

「何の音だろう？」

少年は耳をすませた。

聞こえてきたのはギターの音だった。朽ちて倒れた木が他の木と絡まって、地上からメートルほどの高さで横になっている。その中心に一人の少年が腰かけ、キザに足を組み、ただただギターをかき鳴らしているのだった。

そしてギターの音が止んだ。「誰だ？」その少年が訊いた。

「あー、こんにちは。たまたま通りかかったただだよ」

少年は早口にそう答えた。

「ずっと聴いていたのか？」

「ううん、ついさっき来たばかり」

それから二人はお互いのことを話した。その少年は歌手になりたいとのことだった。

「へえ！ 屋根裏で生活してるのか！ ぜひオレも一緒にいたいね」

「もちろん大歓迎さ！ 行こう今から。待ち合わせしてるんだ」

待ち合わせの教会に小説家は先に来ていた。自己紹介をしてすぐに仲良くなった。

不思議なくらい話が合う少年で、何か魅力を感じた。

「オレは歌手になりたくて孤児院を抜け出してきた」  
新しい屋根裏を探して歩いているときに、ミュージシャンが言った。

「孤児院なんて…嫌なところだぜ。一日がとてつもなく長く感じる」

「屋根裏でギターできるかな？」  
小説家が言った。

「できるんじゃない？ 小さい音なら」  
少年が答えた。

「楽しみだなあ、すごく……ん？…あの家はどうか？」  
ミュージシャンが指差した家は森の近くに建てられた、二階建ての立派な家だった。

「まあ待ちな。あそこに店があるだろう？ あそこ行こう」  
ミュージシャンが言った。

それはその家より二百メートルほど東に位置する店だった。  
中に入ってみると、そこは酒屋だった。

「オイオイ！オレたち未成年だぞ？」

小説家が言った。

「大丈夫、ここのおっちゃん知り合いだよ。その辺は見逃してくれるよ」

ミュージシャンは得意気に言った。

店を出た三人はビールの箱を抱えていた。そして目標の家へ着くと、留守を確認して中に入った。

屋根裏に駆け上がると、そこはキレイに片付いていた。

「家具搬入は明日で良いだろう」

そこらベッドが二つあり、その外にテーブルと丸窓があった。

その夜はビールを一人二缶も飲んで、清談にふけた。一人はギターを、一人は小説を。

少年は自分が何かに打ち込んでないということに、劣等感は抱いていなかった。自由であれば良いと、そしてそれが続けば良いと、願っているのだった。

## <秘密破れ>第一部

それからというもの三人は薊色の街に二つ、茜色の街に三つ、計五つの屋根裏部屋を作り上げた。三人はそれぞれを「気分の部屋」と名付け計それぞれ違った気分のときに違った気分を味わえる部屋にした。そのどれもに、ビールとチェス盤は存在した。

茜色の街で初めて見つけた三階建ての家の当主はシャンデリアおたくで、三人からは「シャンデリアおやじ」と呼ばれていた。

「マツトレスおやじとシャンデリアおやじ、どっちもうるさくてかなわないよ」

茜色の街の屋根裏で、朝の陽射しと風を浴びながら、小説家が言った。

「でもまさか自分の家の屋根裏に悪ガキ三人組が住みついているなんて思いもしないだろうな」

少年がニヤリと言った。

「楽しすぎるよ、それ」

小説家は笑い転げた。

そのとき、朝の新聞を盗みにでかいていたミュージシャンが帰ってきた。

少年が読む番になって、少年は「あっ」と驚いた。それに気づいたミュージシャンが「どうした？」と尋ねた。

「アイツが 僕の父親が捕まったって…」

「以前話してくれた悪魔か？…そりゃ良かったじゃないか」

小説家が言った。

「うん、お金が足りなくなり強盗だって…そして息子監禁の容疑もだって」

「その息子、つまりお前だけど調べられなければ良いな」  
ミュージシャンが不安げに言った。

「そうだね。でも大丈夫。さあ！今日も出かけようぜ！」

三人は十分後には中心街を歩いていた。

そして向かった先はクローバー平原だった。その平原で一時間遊んだあとで、三人は空き家の屋根裏に行った。

そこで少年はベッドのそばに落ちている鳥の羽を見つけた。

「これ…何の羽？」

少年が尋ねた。

「多分蒼鷺の羽だよ。珍しいんだぜ」

小説家が言った。

その羽はとても美しく、少年は迷わずポケットに入れた。

「本当だったんだ」

まもなくしてミュージシャンが言った。

「何が？」

他の二人が口をそろえて言った。

「聞いた話だけど…この空き家、蒼鷺がよく留まるらしいんだ」

「何でだろう？」

「サッパリだけど。どうやら本当らしいよ」

「宝物にしよう！キレイだし…そういうのが一つくらいほしい」

少年が胸を高鳴らせて言った。二人は少年を同時に見てから、少し笑った。

「今日はどこ行く？」

クローバーの絨毯に寝そべりながら少年が言った。

「久しぶりに…マッドレスおやじのところへ行こう」

ミュージシャンが言った。

「ついこの前行ったじゃないか。薊の…もう一つの方はどうだ？」  
小説家が呆れた調子で言った。

「そこにしよう」

三十分後には三人はその家にいた。そしてその家の食料を盗んだ。  
最近、三人の食料が底をついてきたのだ。

小説家の十万円弱と、ミュージシャンのそれより少ない金額で生きつないできた三人だったが、そろそろ危なくなってきた。いたった。

「ゴホン、ゴホン…」

「大丈夫か？ちよつと寝たらどうだ？最近体調が良くない」  
小説家が言った。

「大丈夫…大丈夫だから」

少年はこう言った後もまた咳き込んだ。

「一曲いこう。お前に足りないのは歌の力だ」  
ミュージシャンが陽気に言った。

「調子良すぎるよ」

小説家は苦笑して言い、机に向かって行った。

## <秘密破れ>第二部

翌々日の朝、新聞に目を通した小説家は顔を青ざめた。

「これ見てくれ！ここ、この部分」

そこに書かれていたのは少年の父のことだった。

“少年の部屋のドアに錠前発見！監禁の疑い高まる”

「もう一つ下 そうそこ」

“少年行方不明・警察全力で調査中・自殺の可能性も”

「自殺はともかく調査はマズい…親戚がいないこと、つまりすみかがないことはもう知られてるしな」

ミュージシャンがさも不安という顔で言った。

「しばらく空き家へ逃げ込もうか」

少年が言った。

だがそれから四日後の夕方、茜色の街にいたところを三人はあつけなく警察に捕らえられてしまったのだった。

「お前たち、薊色の街の家で食料を盗んだな？」

取り調べで、いかつくて厳格な警官が三人に尋ねた。

「家の主人が異変に気づいて家中を調べたそうさ。そして屋根裏部屋をみたときは腰を抜かしたそうさ。心当たりがあるな？」

警官はいまだ厳格な目つきで続けた。

「そのときの顔が見たかったね」

ミュージシャンがいたずらに言った。

「息子監禁の事件を思い出してな。この辺の街のすべての家に、  
家宅捜査を強制したんだ。テレビのないお前たちは知らなかっただ  
ろっ」

「新聞に出ていなかったのは？」

少年が冷静に尋ねた。

「お前たちに知れることを恐れたからだ。苦労したぞ、まず新聞  
社に……」

警官がベラベラ話しているとき、三人はとても悔しい思いでいた。  
表に出すのが恥ずかしく強がっていたものの、内心では泣きたいく  
らいズタズタに潰れていた。特に少年は。

「少しチャンスをくれ！時間を！」

少年が警官の話の腰を折って言った。そして

「一晩だけ頼む！どうしても時間がある！」と続けた。警官はも  
ちろん、二人も口をあけたまま驚いていた。

「ダメダメ。逃げるに決まってる！」

警官が言った。

「完全に包囲してくれていい。やらなきゃいけないことがある。  
そして、僕には時間がない」

少年はものすごい剣幕で言った。

「良からう……」

警官は迷ったがやがてそう言った。そして

「ただし二時間！二時間だけだぞ。その間周囲を完全に包囲する」  
と続けた。

話のわかる警官だった。少年は「ありがとう」と言って場所を教  
えると、二人と一緒に外に出た。

「なにする気だ？まさかお前……」

「大丈夫、逃げるつもりはないから。ただ、大事な話がある」  
三人はクローバー平原についた。周りをぐるりと警官に囲まれ、  
おかしい空間である。

秋も終わりに近い。冷たい風が三人の頬を撫でつけ、隅にある柳  
の木も寒そうにしている。

三人はまず空き家に入った。そして持ってきた鉛筆と紙を机の上  
に置いた。

丸窓からは輝く星たちが三人を見下ろしていた。

## <最後の夜>

「何を書く気？」

ミュージシャンが尋ねた。

「もう僕たちみたいな人間をつくっちゃいけない」

「えっ？」

「僕たちの思い出を書く。屋根裏の構造、よく遊んだ場所、お気に入りの店、うるさいオヤジたち……残すんだ、足跡を」

「最後までいい言い方するなよ……」

小説家が言った。少年は少し笑った。

「何で残さなくちゃいけないんだ？」

ミュージシャンが再び尋ねた。

「もしこれから先僕たちみたいな人間がここへたどり着いたとき、これがあれば救いになる。僕たちはこれで終わっちゃうけど、ずっと終わらないくらい楽しく生きてほしい」

「なるほどね。オレたちの思い出が形になるな」

ミュージシャンが納得して言った。

そして三人は書き上げた。記憶を呼び起こし、屋根裏部屋がどうなっているかということ、クローバー平原のこと、よく遊んだ場所などいろいろ書き残した。

そしてそれを机の引き出しにしまった。

次に三人は平原の中ほどに来ていた。三人で小さな円をつくり、座り込んだ。

まもなくして少年が

「大事な話がある」と切り出した。

二人は黙って続きを待った。

「ここで…お別れだよ」冷たい風が円を通り抜けた。  
「何だって？」

二人が尋ねた。

「お別れ…お別れなんだ」

涙ぐんだ少年が言った。

「何言ってんだ、早すぎるぞ」

小説家が言った。

「黙ってたけど…病気なんだ、気づいていたら？」

「き、気づいていたさ、でも治る、絶対に」

ミュージシャンが言った。

「そうかもしれない、でもそれじゃあダメだ。自由もない。迷惑だってかける」

「……………」

二人は黙っていた。

「だからここでお別れだ。永遠に」

少年の声は震えていた。

「死ぬ気か？」

少年は小さく頷いた。

「何も死ぬことないだろ！頭冷やせ」

ミュージシャンが怒鳴った。

「死にたいわけじゃない！でも僕はもう自由を手に入れた」

「自由……………」

「僕は楽しかったんだよ。わかってくれるでしょ？僕の地獄の日々を考えれば…やっと手に入れた自由なんだ。仲間にも恵まれた」  
少年はゆっくりと言った。そして

「もう終わるんだ、それも。この病気だし…お前らに、迷惑かけたくない」と続けた。

「なんの問題もない！そんな気まずい関係か！？」  
小説家が言った。

「言つてたよな？二人とも四年後にはデビューを果たすつて」二人は気づかされたように頷いた。

「そのときにはもうこんな生活してない。僕にはそんな立派な夢がないんだ」

「つまり…刑務所を出てその先の人生つてことだな。出所後立派な夢があるのはオレたち二人で お前はそれがない上に唯一の希望である自由もないつてことか」

小説家が要約した。さらに

「屋根裏も使えないし…」と続けた。

「自由と自堕落は違う」少年が言った。

「さらに病気のことあつて、オレたちの二十歳デビューに支障が出てしまうのじゃないかと」

小説家が付け加えた。

「何より自由をつかんだんだ！友情さえも」

「勝手に話を進めるな。嫌だぞ、そんなのは」

黙っていたミュージシャンが口を開いた。

「わかつてくれ、僕のような人間はそういう人生なんだ。だからもう僕みたいなのが出ないように、書いて残しただろう？」

「だからつて、お前が死ぬことない！」

少し間があいた。遠くでは、何も知らない柳の木が同じリズムで揺れている。

「こつそり抜け出して病院に行つたんだよ。過度な栄養失調で、まるで戦争時代だつて言われた」

「確かに食料が底ついたのは事実だ。でもそれだったらオレたちもそういう病気になるはず…」

「すべては今までの生活にあつたんだ、屋根裏に住む前のね。そこですでに患つていたんだよ。体も弱っちゃつて」

「なあ？本当に…」

ミュージシャンが言いかけた。

「もうすぐ二時間だ…いいね？二人とも？」  
返事はない。

「こんな僕と今まで友達でいてくれて、どうもありがとう…！」  
二人は黙って立ち上がり、背を向けた。

「一つだけ約束してくれないか？」

ミュージシャンが言った。そして

「また会おう」と言った。

少年はにっこりと笑って「もちろんだよ」と言った。

「行つて。そろそろ二時間になる」

少年が言った。二人はフラフラと歩き始めた。

「あ！言い忘れてた」

二人は振り返った。

「四年後！二人でこの空き家に来てくれ！そして机の三段目の引き出しを開けてくれ。そうすればもう、悔いもないから」

「わかった。…じゃあ元気でな。約束は裏切らない」

少年は二人に駆け寄って、小指を絡めた。

「二人とも…元気で」

夜の雫がこぼれた。シロツメクサのざわめきが少年の体を取り巻くようにして聞こえた。風は少し暖かく、今までの話を聞いていたかのように、優しくかった。やがて音も消去った。夜の闇が少年を包み、姿を隠した。

## <約束の再開>第一部

少年が死に、二人が刑務所に入ってから四年の月日が流れた。二人はそれぞれ夢を叶えた立派な青年になっていた。懲役が二年だったので、実質二年で夢を叶えた。

少年の墓はクローバー平原の中心に建てられていた。墓石の前には四角いカンが置かれており、中には貝殻と写真と宝物が入っている。

クローバー平原に集合した二人は、空き家の屋根裏部屋まで登った。

「確か 三段目の引き出し…」

小説家が引き出しを開けた。するとそこに入っていたのは意外にも小さい紙切れだった。

“ 薊色の街・ログハウス・絨毯 ”

「なんだこれ？」

ミュージシャンが言った。

「そこへ行けっていうことだろう」

薊色の街のログハウス、つまり最初に住んだ屋根裏に着いた二人は、絨毯の下をめくった。

するとそこにはまた一枚の紙切れがあった。

“ 薊色の街・もう一方・一番好きな駒 ”

十五分後二人は二軒目に着いた。そしてチェスの盤を懐かしそうに取り出した。「アイツが一番好きだった駒なら知ってる。黒のクイーンだ」

小説家は器用な手でそれをつまむと、中から紙切れを取り出した。

“茜色の街・三階建て・六本線”

十二キロの道のりを電車で駆け抜けた二人は、茜色の街で最初に見つけた屋根裏に着いた。

「六本線でピンときたぜ」

ミュージシャンがギターを持ちながら言った。

「ここで暮らしてるとき買い換えたんだったな…六本線は弦のことか」

「そういうこと！」

ギターの中に紙切れはあった。

“茜色の街・赤い屋根の家・しおり”

茜色の街で三つある屋根裏のうちの一つ、赤い屋根の家はそこから二キロほど離れた、閑散としたところにあった。

「本の間だ。紙切れをしおりに例えたわけか」

小説家が言った。その言葉通り、少年が好きだった本の間に次なる紙はあった。

“茜色の街・黄色い壁の家・椅子のお尻”

三人が最後に作った屋根裏であり、椅子のお尻とは椅子の裏のこどだった。

“出会った森・木のつけね”

二人が向かった先は茜色の街の森だった。少年とミュージシャンが初めて出会った浮いた木を目指して歩いた。

その木の根のある方の土の中を二人は掘り続けた。

「あつた」

小説家が言った。

「何だこれ…おい、まだ開けないでいようぜ。アイツのところで見よう」 すべての屋根裏を回り、一つのカンを手に入れた二人はそのままクローバー平原目指して歩いた。

「やつぱり…今開けよう」

ミュージシャンがそわそわして言った。

「そうするか」

小説家がニヤリとして言った。

二人はタイムカプセルを開けた。すると中にはギターのピックと一本の鉛筆、そして小さな手紙が入っていた。手紙はごく短なものだった。

“もう一度会おう”

二人は何かを察した。そこで、予定を変更して二人とも家へと帰っていった。

## <約束の再会>第二部

数日後二人は少年の墓の前にいた。

「意味がわかったよ。お前はオレたちがどれだけ成長したのを知りたかったんだろ？」

ミュージシャンが言った。

「オレたちからのプレゼントだ。なるほどそれで“悔いはない”って言ったのか」

小説家が言った。

それからミュージシャンは、タイムカプセルの中にあつたピックを使って、自分で創つた曲を少年に捧げた。

小説家は“屋根裏の冒険”というタイトルの本を供えた。タイムカプセルの鉛筆を使って。

「少しは元気出たか？それじゃあな」

二人は墓を少し離れた。

そのとき二人は、遠くから二人をずっと見ている一人の女性に気がついた。その女性は二人に近づいてきて、挨拶をした。

「どなたですか？」

小説家が尋ねた。

「その子の母です」

女性はうつむきながら答えた。

「失礼ですがそういった立場おかれていないということを、わかった上で言っていますか？」小説家がそれを咎めようとしたが、女性がそれを止めた。

「わかってます…私は逃げてしまったんです。本当にだらしない親だと思っています」

「気まずい空気が流れる。」

「何をしにここへ？」

小説家が沈黙を破って言った。

「あの子の名前、ちゃんとあるんです。それだけ伝えたくて……」

「では ぜひ聞かせてください」

小説家が言った。

「お墓にある貝殻……あれは昔あの子と海へ行ったとき見つけたものなんです。今でも残っているとは思いませんでした」

女性は一度言葉を切った。

「とにかく海を愛していました。海のように自由になりたいと言っていました。だからあの子の名前は“海” カイというんです」

「海……」

二人は口をそろえて言った。

「海のことはニュースで知りました。私はあの子に会うことは許されません。だからこれで……」

女性はそう言いかけて墓の方を見たが、驚いたように目を見開き、墓に近寄った。

「これは？」

女性を取り出したのは三人の宝物、蒼鷺の羽だった。

「あそこの空き家の屋根裏で拾ったのですが、それがなにか？」

「帰る前に思い出したわ。昔の、蒼鷺のお話」

二人は顔を見合わせたが、その話を聞くことにした。

「昔」と言ってもそんなに古くはないけれど……一人の貧しい少年がいた。その少年は病氣にかかっていて親もいない苦しい生活だった。少年は蒼鷺を飼っていて……唯一の友達でもあった」

女性は、何の話かわかっていない二人を見て静かに微笑むと、また続けた。

「哀れに思った蒼鷺は少年に家を与えた。それが空き家の屋根裏よ」

二人はここで「なるほど」と心の中で思っただけだ。

「そして食べ物を運んだりして、助けてあげた。少年はその感動と感謝を忘れないために…同じ災難に遭った人が困らないために…屋根裏の地図を残して死んでいった。あなたたちが拾ったその羽は、きっとその蒼鷺の羽だと思うわ」

「そんなエピソードがあったとは…」

二人は感嘆の息をもらした。

「じゃあこれで…」

女性はその場を立ち去ろうとした。

「話してくれてありがとうございました」

ミュージシャンが言った。

「アイツ、言っていました。きっと優しいお母さんだって。なにがあっただけ見たかはわからないけど…オレも今日そう思いました」  
女性は背を向けたまま聞いていた。

「だから忘れないでください。海のこと、たまには、名前を呼んでやってください」

女性は顔だけ振り向き、「ありがとう」と、美しい笑顔で言った。  
そしてその場を去っていった。

「これからどうする？」小説家がすまして言った。

「そりゃあ、自分の道を生きる！海がそうだったように…」

「似合っていないぜ！そんな言葉！」

「ほっとけよっ！」

「……まあ…そうだな、帰ろう。海もきっと笑ってる」

「お前も似合っていないって…」

二人は歩き出した。クローバーをしっかりと踏みしめて、風を全身で受けた。

不意に、少年が呼んでいる気がして、二人は同時に後ろを見た。そして暖かい風が通り過ぎた。

二人は顔を見合わせて少し笑った。

二人はまた、歩き始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8361r/>

---

屋根裏の冒険

2011年5月3日10時16分発行